

須藤健一 新館長に聞く

知的パワーに満ちた 次世代研究者の育成が 私の使命

聞き手 久保正敏 (本誌編集長)

四月に就任した須藤健一館長。創設まもない民博に着任して一八年間在籍、神戸大学を経て民博には一六年ぶり。研究者としての歩みと関心事、研究機関としての民博の課題と問題の所在、博物館としての今後など話題と抱負は縦横に

―館長は、民博創設期の一九七五年一〇月にオセアニア研究者として着任され、オセアニア展示に力を注がれました。なぜオセアニアだったのですか。
ひとつは、私が新潟県佐渡に生まれ、島育ちだということ。大学院でもやっぱり、伊豆七島や奄

美などの島の社会や家族、世界観などを調査していました。島というのはいわば完結する世界をつくっていますから、社会の全容を把握・理解しやすいんですね。くわえて、私は家父長的家族のもとで育ちましたから、比較という点で身近だったのがミクロネシアの母系社会でした。

万国博世代を受け継いだ 海洋博世代

最初に現在のミクロネシア連邦を訪れたのが一九七四年、私が東京都立大学の博士課程のときでした。かつては日本の本土防衛の軍港で当時はトラック諸島とよんでいたチューク州の島嶼部を中心に、四か月間滞在しました。その後も母系社会を納得のゆくまで調査しようと、ミクロネシアに通いました。母系社会ですから婿入り婚。男の地位の低さ、悲哀を感じさせられましたね(笑)。―男性の研究者には母系社会はなかなか見えにくいことはないのでしょうか。

母系社会では、奥さんから「魚をとりに行ってください」とか「これからタロイモ田に行くからあなたは子守りよ」、なんていちいち言われたり、夫はけっこうコントロールされていますね。ところが、男は自分の生まれた村や母系一族の人たちのところに行くと、そこではチーフであったりする。姉妹だけでなく、姉妹の旦那さんも気をつかってくれる。母系社会では、男は結婚して婿になると「しもべ」、実家に帰ると「王さま」というふたつの地位を演じることになります。

「男というのはたいへんですね」と言うと、「須藤さん、馴れればだいじょうぶ、体がそうなっていますから」ってね(笑)。とはいっても、州都



すどうけんいち
須藤健一
国立民族学博物館長

新潟県に生まれる。東京都立大学(現首都大学東京)大学院社会科学部研究科博士課程単位修得退学。文学博士。専攻は社会人類学。著書に『母系社会の構造―サンゴ礁の島々の民族誌』(紀伊国屋書店、1989年)、『文化人類学事典』(丸善、2008年、編集顧問)、『オセアニアの人類学―海外移住・民主化・伝統の政治』(風響社、2008年)などがある。

に出かけて自分の子にお土産を買うときは、自分の姉妹の子どもにも買わなくてはいけない。自分の子だけを可愛がっていると姉妹から、「もう、あなたの助けはしないわよ」と言われる。彼らは、それを天びん棒にたとえて、「婿入り先と生まれた実家とのバランスがだいじ」と。しかし、最近のミクロネシアでは、妻と子どもたちを優先する傾向が強くなっているようです。

そもそもミクロネシアに行くきっかけは、海洋博(沖縄国際海洋博覧会)でした。沖縄の本土復帰を記念して一九七五年に本部町で開かれた国際博覧会です。

一九七〇年の大阪万博(日本万国博覧会)では、仮面を中心に世界各地の民族資料を集集・展示し、その後、梅棹忠夫さんなどが「万博のあとに民博を」と呼びかけて万国博跡地にこの民博を誘致しました。同じように、海洋博でも太平洋の島嶼地域の生活用具や民族資料を集めて、ゆくゆくはオセアニア地域の博物館にしようという計画がもたらがりました。



開館間もないオセアニア展示場でのサタワル島の帆走カヌー「チエチエメ二号」

梅棹忠夫さん、大島襄二さん(関西学院大学。当時)、石川榮吉さん(東京都立大学・当時)の三人が中心となって行動されました。若手の研究者や大学院生などを一五人ほど選んで、オセアニアやアジアの島嶼部の各地に送りこむことになり、私はチューク諸島での調査を希望したという経緯があったのです。海洋博で展示する儀礼用の木鉢や暮らしの用具、漁具などを収集するかたわら、民族学的な調査をしてみました。海洋博では、私たちが集めた資料は、政府出展館である海洋文化館に展示されました。これは現在も沖縄の海洋博公園で博物館として機能しています。

「チエチエメ二号」の故郷 サタワル島と出会う

やがて、民博にこないかという恵まれた話があった。七五年一〇月にこの千里にきました。当時は万博記念協会ビルの一画を間借りして、当時の文部省から移管された民族資料をプレハブ倉庫で整理しながら七七年一月の開館にむけての展示品選びが重要な仕事でしたね。

オセアニア展示のチームは石毛直道さん(民博名誉教授)を隊長に、私と石森秀三さん(北海道大学)、秋道智彌さん(総合地球環境学研究所)の三人でした。大海原をカヌーで航海して太平洋の島々に移住し、その海に暮らす人びとを象徴する展示には帆走カヌーが欠かせないと、海洋博の会期中にミクロネシアの島から沖縄までほぼ三〇〇キロメートルの航海をなしとげたチエチエメ二号も譲り受けました。これを入り口近くに置いて、その周辺に漁具、衣服、住居などの暮らしの世界、さらには交換品などの価値の世界と、

仮面など儀礼世界の展示を構想しました。この展示は大きな変更もなく、現在にいたっています。

民博がオープンしたころ、オーストラリアやハワイなどの大学で、近代的な航海器具を使わない航海術が注目を浴びていました。ミクロネシア連邦のヤップ州の最東端の離島サタウル島はチューク州の最西端にも近いのですが、太平洋地域でもっとも伝統的な航海術を残している社会のひとつです。三か月に一度くらいしか連絡船がこないから、帆走カヌーと航海術がないと、無人島での漁撈、他島への親戚訪問や交易航海もできない。

八〇〇キロ、一〇〇〇キロを帆走カヌーで航海する伝統的航海術を支えている人びとを調査しよう、サタウル島に石森さんと二人で一九七八年に四か月をかけて予備調査に行きました。次の年には秋道さんにも加わってもらって本格調査。サタウル島は一周六キロ、人口約五〇〇の小さな島で、三人で調査する規模ではないのですが、生業と自然環境は秋道、社会・経済は須藤、宗教・儀礼は石森と分担を決めて総合的に調査しました。

―サタウル三人組と言われましたね。

そうでした(笑)。島の人たちへの恩返しの意味もあって、「サタウル語―英語辞典」をつくらうと、島での調査助手に民博にきてもらい、一年半くらいをかけて辞書づくりをはじめました。それから三〇年ちかかたって、オセアニアの言語を研究している菊澤律子さん(民博)の全面的な協力を得て、ようやく完成一步手前まできました。

一九七〇年代の時点で、星のコンパスと海流のうねり、貿易風を頼りに航海する伝統的な航海術を伝えているのは、このサタウル島とその東のブルワット島(チューク州)の二つしかなかったのです。なかでもサタウル島の航海者は、復元した

―外庄による自然破壊と自立を求める住民運動の代表例の一つでしょうか。島嶼社会のあり方もいろいろ違うようで、それぞれの現状と変化を追いかけていられるんですね。

サタウル島でも最近人口が増えて、ヤップやグアム、ハワイに三〇〇人が移住するなど、社会の変容はやはりどんどん進みます。この動きをどうとらえ、島社会にどう貢献できるかも、これからの仕事だと思っています。

―国境を越えた動きを追うなかで、神戸大学に移られたんですね。

神戸大学には、誕生してまもない国際文化学部をキラキラ光る学部にしたいと、一九九三年に異動しました。

教育改革に取り組んだ神戸大学時代

まず取り組んだのが交換留学。交流委員長として外国の各大学と協定をむすび、ゼロだった留学先の授業を受けながら、現地の言葉も修得できる環境の大学を対象に、英独仏語圏のほか、ルーマニア、ポーランド、ベトナムなどの大学とも協定しています。こうした制度によって、国際的な舞台で活動できる人材を育成しています。JICA(国際協力機構)や外務省、海外進出している会社に就職する人も多くなっています。

外国語教育にも取り組んで、教室の外でも語学を学ぶ機会をつくらうと、国際コミュニケーションセンターをもうけました。読み書きから、聞く話すの両方ができるように、統合的かつシステムテックな外国語教育ができる場です。学びたい語

ポリネシアの双胴帆走カヌーでハワイ諸島とタヒチ島間の実験航海のキャプテンとして招かれ、これを成功させました。ハワイの人たちはこの実験航海によって自分たちの祖先がタヒチからきたことを確認し、今日では、これに新しい知恵と技術を盛り込んだ独自の航海術が若者に伝えられています。伝統的な航海術がハワイアン・アイデンティティと文化復興に貢献しているんですね。サタウル島の人たちはよくぞオセアニアの伝統を残してくれたものだと思います。

変容するオセアニアをみつめるなかで

九〇年代には、ポリネシアのトンガ王国に数年間通いました。ここは一九七〇年にイギリスから独立したものの経済的自立ができていない状態でした。結局、彼らはハワイやニュージールランドに移住して、生活水準を向上させるとともに、お金



久保正敏編集長(左)と須藤健一館長

学をきちんと修得できるようにし、意欲のある学生は海外に出られる仕組みを整えました。

―日本文化人類学会長、日本オセアニア学会長などとしても活動されていますね。

文化人類学は、停滞的な状況にさしかかっています。これは学問的性格によるものですが、学会としてやらねばならないこともある。大学生や高校生に文化人類学という名前を知ってもらう、文化人類学に関心をもってもらうことです。そこで、文化人類学とはなにかを理解してもらう場をもうけました。第一回を東京と神戸で、第二回は広島で開催しました。ただの講演ではおもしろくないだろうと、生活用具などを見せながらモノの意味と人間との関係など、二、三人の講師に文化人類学をおもしろく話してもらいました。ただ、残念なことには高校生はあまりこなかった。集まったのは高校の先生や大学生、社会人の方々でした。異文化理解の教科を初等中等学校に新設するまでには言わずとも、教育のコンテンツを充実させ

を本国へ送る方法を選びました。といっても、移住する人の数が半端端ではない。国民人口も多い。そのかわり本国にいる親たちは左うちわ。いい家に住んで、車もある。移住した子どもたちが、そのお金や物を送ってくれるからです。

―おもしろいですね、ある意味、国境がバーチャルに拡大していますね。

国境を越えた家族。彼らは移住した先でも、フォーマルな場ではトンガの伝統的な服装を必ず着けます。トンガの財産であるタバ(樹皮布)やゴザなども移住先に持参し、移住先の社会でもそれが交換財になっています。そうした移住は一九七〇年にははじまっていますから、まさにグローバル時代の先兵たちです。

二〇〇〇年代に入ると、メラネシアのソロモン諸島で調査をはじめました。かつては豊かな原生林の茂る島でした。ところが、自然保護の高まりとともに、マレーシア政府やインドネシア政府がボルネオ島での日本向けの森林伐採を禁止すると、そこから業者がどっとソロモン諸島に流れてきた。ソロモンの人たちは裏山の木が金になるというので飛びついたんです。ところが、山に木がなくなると雨が降ると土砂が川に流れ、珊瑚礁は死に魚もいなくなる、井戸水は飲めなくなる。

これではいけないと、NGOや教会の人たちが助言に入りました。「お金が欲しいなら、子どもたちに教育を受けさせたいなら、自分たちで一年に数本の木を切つて角材にして売ればよい」と。運動はある程度の拡がりを見せています。しかし、民族紛争が起こったりして、けっして順調とはいえませんが、「山は国のものではない、共有の財産としてみんなで守るんだ」という意識がしだいに定着しつつあります。

てほしいという要望書を日本地理学会などと一緒に文部科学省に出しています。

民博が

民博であるための条件

日本文化人類学会では『文化人類学事典』(丸善)を編纂して刊行しました。高校生には少し難しいかもしれませんが、ストーリーで文化人類学の考え方を伝えるものにしていきますから、大学生や高校の先生には学問のおもしろさを知ってもらえるはず。

民博やその他の学会と協定をむすび、学会賞を設けて優秀な若手の養成もしています。文化人類学会の会員は約二〇〇〇人、民俗学や文明学、芸術学など、関連する学会をふくめるとそれらの会員は一人くらい。そういう研究者コミュニティの核に民博がなるよう努めないといけない。そのうえで国際学会との関わりも強める。

国際人類民族科学連合という国際的な組織はありますが、近年あまり活動していません。ですので二〇〇四年に小泉潤二会員(大阪大学)が中心になって人類学会世界協議会を結成しました。いまでは二八、九か国の主要な人類学会が加入しています。国際的な裾野を拡げること欠かさないと考えています。

―民博がめざすべき方向をどうお考えですか。

開館三〇周年記念の一連の事業には、「民博には質的にも量的にも、これだけのものをこなす知的パワーがあるんだ」と感激しました。人間だと三〇年もすれば一代が終わる。組織も三〇年もすれば劣化するといえます。しかし、民博は違う。第二世代が育ち、その若い世代を中心に新しい息



吹が民博に芽生える可能性があると感じました。とはいえ、そういう力をどの方向にむければよいのかと考えると、目玉がない。民博は共同利用機関法人、共同研究の拠点ですよ。四〇ほどの共同研究を進めているし、共同研究と研究スタッフの公募制も採り入れて改革をおこなっていることは評価できます。しかし、「これこそが民博の研究だ」という姿は明らかに見えてこない。アカデミックな分野で、国際的にも認知されるような研究を一層推進する必要があります。

民博は欧文刊行誌の『SE』を出版していて、外国の研究機関や人類学関係者はこれをとおり「日本に民博あり」と、民博の研究の質の高さを評価していた。かつて谷口国際シンポジウムは、一〇年にわたり海外の研究者を招いて一週間のあいだ合宿のようにして特定のテーマについての議論・交流していましたね。あのような国際研究集会を実施したいものです。民博は、今年度からあらたな機関研究をスタートさせますから、これをどう伸ばすかです。

海外の研究機関との学術交流の促進も課題です。スタッフが往來して国際シンポジウムを共同で組織するような仕組みを用意したい。台湾や韓国との博物館間協定やフランス等との研究所間交流もしょうか。

今、常設展示のリニューアルを進めています。展示が三〇年間そのままでは人はきてくれません。三月二日から特別展「千家十職×みんぱく——茶の湯のものづくりと世界のわざ」を開催しています。千家をはじめ、十職の方々にご尽力いただきました。利休は桂川の漁師が腰につけていたビクに美を見いだし花入れにしたそうで、その「桂籠花入」は名品として今に伝わっています。同じように、民博が収蔵する世界の生活用品のなかから新しい感覚の美を発見していただきました。驚嘆に値する新しいかたちの展覧会になりました。入館者を増大させる契機となるのではないかと、私は期待しています。

多くの人が気軽に海外に出かける時代です。しかし、現地を見てきたモノには、もつと奥深いなにかがあることを知っていただきたいのです。開館三〇周年記念のキャッチコピーのようにモノをとおして「知の奥へ」誘いたいのです。その手段の一つとしてのモノをどう活用するか。どう仕掛けて、どう展開するか、これも私の課題だと思っています。

「モノから入って「知の奥へ」到達する仕組みの開発ですね。」



さらに進めてもらいたい。館員の業績や成果、出版物が国際的に認知され、国際的なスタンダードにあることを確認できる組織にしたいと思います。

社会に還元する 実践人類学を展開したい

民博の研究の基本スタンスは、フィールドワークに基づく研究だと思っています。自己満足の学問に留まることなく、研究成果を社会に還元する実践人類学を進めたいと思います。日本の海外援助の施策においても、人類学者がそなえている国際的なモラルやセンス、あるいは人類学の立場からの援助評価などが、実践の場で活用されるようであってほしい。海外援助には、実施の可否の評価を含めて指針が必要です。人の暮らしに関わる部分の援助のあり方については、それぞれの研究者に発言したいことがあるはずですよ。



トンガ王国は皇民教育が盛んで、国王戴冠式の記念パレードには高校生たちもかり出された(2008年)



王宮近くの公園の入り口に掲げられたパネルには「王の世が永遠に続きますように」と書かれていた



ミクロネシア連邦ヤップ島の古老から話を聞く(1997年)

共同利用機関としての民博は、資料をどのように活用すべきかと考えますか。

内外の人文社会科学系の研究者などで、民博の資料を使って研究したいという人がいれば、どんどん使っていたら、そういうスタンスで貢献すべきだと思っています。研究者であれば閲覧できる制度がありますが、もつと簡単に利用できる仕組みがあつてよいのではないのでしょうか。

民博の資料を、しっかりと保存するものと、積極的に利用してもらつたものとに分けることはできないでしょうか。民博の持ち味のたくさん映像資料の活用策もあるはずですよ。

それは共同利用機関としての責任ですね。現在、各大学の付属研究機関が大学共同利用機関に改組する動きがあります。共同利用機関の先輩である民博は共同研究だけでなく、なにをすべきかが問われることとなりますね。

博物館としての民博は、どのようにあるべきで



そう、入口の一つとしてのモノ。「みんぱく」は貸し出し希望も多いですから、民博の館員も地域社会に出かけて子どもたちと話す機会ができればいい。大学も高校に出かけて「出前授業」をおこない、一般向けに公開講座をする時代です。民博は「みんぱくゼミナール」を月一回館内で開催していますが、民博だつて外に出ることが必要です。自治体の公開講座があればどんどん出かければよい。私のアイデアの段階ですが、民博の館員五人が一組になって「五週連続講座」のようなイベントを増やしてみたらどうかと……。民博に関心をよせる人が増えるし、社会的貢献としてもやるべきです。

民博館長として、民博と文化人類学の今後の抱負をお願いします。

あるアメリカの人類学者は、「一九世紀後半ま

での地球上には数千の文化があつたが、現在は二〇〇しかない、文化はほとんど失われている」と指摘しています。グローバル化は世界に大きな影響を与えますが、多くの社会では外からの新しい文化や制度をしたたかにローカライズしてゆきます。こうした現代社会の支配的な思想や文化要素にたいして世界各地の社会や文化がどのように対応しあつて、現地の人びとがそれを自分たちの伝統や価値観とどのように折りあいをつけているかを語るこのことができるのは、そこにじっくり住み込んで、現地の人と深い信頼関係を築いてきた人類学者たちです。私たちは、そういう状況を適確に把握して正確に記録に残す、それが大事なんじゃないでしょうか。現地の人びとの営みと人類学者のこの姿勢を続けるかぎり、文化の多様性は失われたいと信じています。